

みんなの楽しい学校をつくるために

弘前市立文京小学校 古川 隆 惺

ぼくがこの本を読んだきつかけは、自分も児童会長にきょう味があつたからです。

きつと、この本を読めば、児童会長になる方法や児童会長の仕事に分かると思いました。

でも、この本は、負けずぎらいで熱い主人公の横山雷太が、周りをまきこんで、児童会長になるために、演説をしたり、ポスターなどで、自分の人気を高めたりするというむずかしいチャレンジを、次々とこなしていくワクワクするお話で、続きが気になるので一気に読んでしまいました。

主人公の雷太は、なんて楽しそうな学校生活を送っているのだろう。これが、読み終えたときに、最初に感じたことです。雷太は、勉強も運動も得意ではなく、先生にもよくおこられます。最初は、こんな人が児童会長なんて絶対ありえないと思っていました。児童会長になる人は、勉強や運動が得意で、みんなのお手本となる人だと思っていました。でも、雷太は正反対の人です。でも、雷太には、とても信頼できる

仲間がたくさんいます。クラスのみんなが協力してくれそうです。雷太のいいところは、まわりの人が協力したくなる人がらだと思えます。それは、同じ学年だけではなく、一年生から六年生までです。ぼくも勉強や運動は一番ではありませんが、雷太のように、クラスや年れいがちがっても助け合いができる人になりたいと思いました。

次に、この本を読んで強く心に残ったのは、最後の演説で、「みんなをグイグイひっぱっていくような児童会長にも、たぶんなれません。だから、もし、オレが児童会長になったらみんなで助けてください。で、どうしたら楽しい学校になるか、意見を出してください。解決できることばかりじゃないけどオレもいつしよになやむから。考えるから。ひとりになやまないで」という雷太のせりふです。この言葉から、雷太が一人でこの学校をよくするのではなく、みんなで意見を出し合い、助け合つて、よりよい学校にしようという気持ちがあるととても伝わりました。この本を読む前のぼくが児童会長

になったら、リーダーシップが大事だと考えてグイグイひっぱっていくが、みんなの意見を聞かずに、楽しくない学校になつていたと思います。でも、みんなのことを考えて、協力し助け合うということがとても大事なことだとわかりました。ぼくや学校みんながそのように考えることで、今よりずっと楽しい学校になると思います。

ぼくはこの本を読み終えて、児童会長は、成績や運動だけでなく、どんなに悪いことがあっても、あきらめずに乗り越えられる気持ちが大切だとわかりました。これから、ぼくは児童会長になれるようにみんなのことを考えて、協力し助け合いながら、みんなで楽しい学校生活をすごしていきたいです。